

日本医史学会編『医学史事典』刊行記念  
令和5年1月例会

第三部 日本の医学(1):  
古代から近世まで【蘭学・蘭方編】

—西洋医学の受容と展開—

青木 歳幸

『医学史事典』の蘭学部分の内容を要約して紹介する。下線部は項目、()内は執筆者。

**西洋医学の到来** (W.ミヒェル): ルイス・デ・アルメイダ, クリスヴァン・フェレイラらの南蛮流外科の到来や南蛮流医師とされる栗崎道喜, 杉本忠恵らが南蛮流, 中国医学, オランダ人医学らを参照する折衷的医療を紹介した。**出島オランダ商館と紅毛流外科の誕生** (W.ミヒェル): 東インド会社がカスパル・シャムベルゲルを派遣し, 幕府側の大目付井上筑後守政重は, カスパルを幕府重役の診察に当たらせるなどイニシャチブをとり, カスパル流外科が生まれた。**紅毛流医学の基礎を築き上げた17世紀の商館医** (W.ミヒェル): Hans Juria(e)n Hancke, Herman(us) Katz, Daniel Busch, Willem ten Rhijne, Engelbert Kaempferらによる日本人医師への教授を伝える。**「通詞蘭学」の芽生え** (W.ミヒェル): 商館医との医学交流で, 西吉兵衛, 榎林新右衛門(鎮山), 本木良意らが蘭学の力量を高めた。初期通詞が受けた蘭学は, 実用的な「小外科学」であり, 高度な病理理論はみられない。**洋医学書の到来と利用** (W.ミヒェル): 17世紀には, パレの外科全書, ヴェサリウスの『人体の構造』, 『アムステルダム薬局方』などや, 18世紀には8代将軍吉宗の洋学奨励策以降, 舶載蘭書が増加した。本木良永, 吉雄耕牛など傑出した翻訳者が出た。**在来薬草の合同調査と新薬草の導入** (W.ミヒェル): 家綱時代にテン・ライネらが日蘭合同での山野での採薬などを行い, 貝原益軒が日本独自の本草学への関心を高めた。吉宗

時代に大量・多種の薬草が輸入された。17世紀のアンドレアス・クライヤーの植物調査は, ケンベル, ツンベリー, シーボルトの薬草調査を可能にした。**抄訳から全訳へ** (鳥井裕美子)は, 吉宗の「禁書」緩和以後, オランダ語学習に飛躍が生まれ, それまでの抄訳から杉田玄白・前野良沢らによる全訳へと困難ななかでの翻訳作業が進められた。**人体観の変遷・近世解剖学の黎明** (坂井建雄): ヴェサリウスやレメリンの解剖書などが輸入され, 万治2(1659)年には豚の解剖も行われた。中国医学における検視や, 仏教における九想図への関心も高まった。18世紀中頃には人体の「客体化」意識が高まり, 腑分けの前提になった。**刑死体解剖の普及** (坂井建雄): 京都の山脇東洋の腑分け記録『蔵志』(1759)や杉田玄白らの『解体新書』(1774)刊行により, 五臓六腑説への疑問が広がり, 各解剖図などで人体の構造が明らかになった。わが国の解剖図は解体過程や刑死体そのものを写實的に描いている。**知を得る新しい道: 『解体新書』とその後の訳書** (青木歳幸): 『解体新書』は, 新たな臓器の発見, 通詞でない日本人による西洋医学書の翻訳等の意義があり, 以後ハイステル外科書から『瘍医新書』, ゴルテルの内科書から『西説内科撰要』など, 翻訳書によって新たな医学知を得る道が開かれた。**洋方医学の拡散** (青木歳幸): 大坂・京都および江戸で蘭学塾が台頭し, 長崎通詞蘭学も, 志筑忠雄の『曆象新書』(1798~1802)などにより自然科学的な認識が高まった。幕府天文方に蕃(蛮)書和解御用を設置

され、私学であった蘭学が公学となった。**在村蘭学：蘭学者門人の地方的広がり**(青木歳幸)：各地の蘭学塾に学んだ医師らにより地方に西洋文物や学説をもたらされ、『解体新書』を読み解体人形を作成したり、長崎に出かけて医学修業をする農民も現れた。**長崎遊学と通詞蘭学者**(W.ミヒェル)：出島商館医から最後の証書は1685年黒田藩医原三信に与えられた。長崎遊学者は、中国文化の受容とオランダなど西洋文化を学び、19世紀になると兵学や造船術などを学んだ。**単語帳から辞書へ**(片桐一男)：紅毛流医学時代に単語帳がつくられ、最初の蘭日辞書は『ハルマ和解』(1796)で、その後、三伯門人の藤林普山の小型辞書『訳鍵』(1810)を経て、本格的な蘭日辞書『ゾーフハルマ』(1833)が成立し、写本として広まった。**蘭医学の成立**(相川忠臣)：外科学の楢林鎮山や吉雄耕牛、眼科学の杉田立卿『和蘭眼科新書』(1815)、産科学の賀川玄悦『産論』(1765)、内科学の宇田川玄随『西説内科撰要』(1793~1810)、宇田川榕庵『舎密開宗』(1837~47)などが、蘭医学の発達に貢献した。**疼痛を取り除く：全身麻酔の始まり**(松木明知)：華岡青洲は全身麻酔薬として、曼陀羅華などを成分とする麻沸散を発明した。文化元(1804)年の乳がん剔除手術により、全国各地から門人が集まった。**出島商館の巨匠**(W.ミヒェル)：ケンペル、ツンベリー、ティツィング、シーボルトを出島商館医の巨匠としてその業績を紹介した。**医学校・医学所の普及・西洋医学と藩の政策**(坂井建雄)：山崎佐の『日本教育史資料』に基づいて、272藩中95藩に医学教育の場があり、米沢藩や佐倉藩、佐賀藩な

どの医学教育を紹介した。**薬品会・物産会(和・蘭・漢)**(吉村美香)：江戸では宝暦7(1757)年の物産会、京都では山本亡洋、尾張では伊藤圭介らの物産会、薬品会などで博物研究が深まった。尾張の嘗百社、江戸の楮鞭会などの博物研究グループにより、知識も蓄積された。**近代西洋医学の夜明け**(相川忠臣)：シーボルトの門人達が各地で蘭学塾を開き、西洋医学を普及させた。モーニッケは、来日の翌嘉永2(1849)年に牛痘種痘に成功した。**中国を介した西洋医学の受容**(真柳誠)：中国経由の西洋医学の受容も少なからずあった。とくに英人ホブソン(合信)は、『全体新論』(越智蔵版, 1857)、『西医略論』(三宅良斎翻刻, 1858)、『博物新編』(万屋兵四郎版, 1864)などの翻訳書のもとを著し、大きな影響を与えた。**医療道具／医科器械**(園田真也)：眼鏡は、江戸時代中頃には市井に広く出回るようになり、国産化も工夫された。プレんキの眼科書が『眼科新書』(1815)として翻訳され、天保年間に『眼科錦囊』『続眼科錦囊』が図入りで刊行された。**西洋世界への窓口としてのオランダ商館**(W.ミヒェル)：出島のオランダ人は商館長や次席商館長、書記役など9~15人で、雇用された日本人が100人以上島内にいた。ヨーロッパへは、東洋医学、とりわけ鍼灸術が伝えられた。**看護の歴史**(平尾真智子)：◆江戸時代以前の看護思想を整理し、江戸時代には平野重誠『病家須知』(1832)など病家の看病を主体とした書がでた。戊辰戦争時には、政府軍の横浜軍陣病院に介抱人が雇用されている。

本書は楽しく読め、新たな発見があり、新たな研究の着想が芽生える書である。